

## C-25 てんかん精神病の多重操作化診断—多施設共同研究—

てんかん精神病多施設共同研究グループ

○松浦雅人、足立直人、小穴康功、大久保善朗、大沼梯一、加藤昌明、小島卓也、武井教使、中野隆史、原常勝

てんかん精神病は不均質で多様な病態からなり、精神病発症と発作との関連や経過によって分類されている。これらの分類と精神病診断との関連を検討するために、McGuffin らが考案した多重操作化診断プログラム(OPCRIT, Operational Criteria Checklist for Psychiatric Illness and Computer Programs Ver3.4, 1998)を用いて、てんかん精神病の操作的診断を多施設で行った。

＜対象と方法＞精神病は、ICD-10 に準じて「明らかな意識障害がなく、幻覚や妄想あるいは明らかに異常な行動、すなわち極端な興奮や過活動、顕著な精神運動制止、緊張病性行動」と定義した。まず8例の標準カルテを用意し、OPCRIT を用いて多施設の研究者が評価して一致率を求めた。ついで、各施設の自験例について、後方視的にカルテ調査を行った。

＜結果＞標準カルテの評価者間一致率は、ICD-10 (0.79～0.87)、DSM-IV (0.83～0.85)、DSM-III-R (0.89～1.0)と高い値が得られ、OPCRIT の妥当性が確認された。これまでにてんかん精神病 51 名(男 22、女 29)が集積され、平均年齢 39.0 ± 12.9 歳、てんかん発症年齢 12.3 ± 8.7 歳、精神病発症年齢 30.2 ± 10.3 歳であった。てんかん類型は、側頭葉 27 名、非側頭葉性部分 20 名、特発性全般 4 名であった。発作との関連による分類では、発作間欠期精神病 31 例、発作後精神病 15 例、交代性精神病 5 例であった。この分類は DSM-IV (クラメールの V 値 0.55)、DSM-III-R (0.52)との関連が高く、ICD-10 (0.39)との関連は低かった。DSM-IV 診断によると、発作間欠期精神病は精神分裂病(11 例/12 例中)、妄想性障害(9 例/10 例中)、分裂病型障害(3 例/4 例中)の頻度が高く、発作後精神病や交代性精神病は分裂病様障害(4 例/4 例中)と分裂感情障害(1 例/1 例中)の頻度が高かった。側頭葉てんかんと非側頭葉てんかんを比較したが、精神病診断に差はなかった。一方、経過類型による分類では、急性精神病 14 例、急性反復性精神病 21 例、慢性精神病 16 例であった。この分類も DSM-IV (0.48)や DSM-III-R (0.49)との関連が高く、ICD-10 (0.25)との関連は低かったが、発作との時間的関連による類型分類に比べるといずれも低い値を示した。

## C-26 「ポケモン」視聴により光感受性発作を起こした患児ならびに未治療のてんかん患者の映像点滅刺激時の脳波所見

北里大学医学部小児科

砂押 渉、三浦寿男、白井宏幸、細田のぞみ、島貫 郁、武井研二、片山文彦、岩崎俊之、富加津雅己

〔目的〕：「ポケットモンスター事件」後、日本放送協会と民間放送連盟が制定した「アニメーション等の映像手法に関するガイドライン」の検証を目的として、ブラウン管映像点滅刺激が小児の脳波所見におよぼす影響を検討した。

〔対象ならびに方法〕：対象は、Ⅰ群：「ポケモン」視聴により光感受性発作を起こした、反復光刺激負荷脳波検査(負荷脳波)施行時年齢 6～16 歳(平均 11 歳)の男子 3 名、女子 1 名の計 4 例、Ⅱ群：検査施行時未治療の 5～19 歳(平均 11 歳)のてんかん症例 9 例(男子 5 名、女子 4 名)で、Ⅱ群には臨床的に光感受性が明らかな者 4 例を含む。さらに、腹痛精査のため施行した脳波検査時に併せて負荷脳波を実施した 6～14 歳(平均 10 歳)の男子 4 名、女子 4 名の計 8 例(Ⅲ群)を対照とした。負荷脳波検査を行う際には、本人ならびに保護者から文書で同意を得た。

映像点滅刺激負荷(映像刺激)は、あらかじめ刺激映像を編集記録した VHS ビデオテープを再生、被験者の正面 2 m の位置に設置した 25 インチテレビで提示した。映像点滅は、ブラウン管上の 0IRE 黒色を背景として、30IRE 灰色が点滅する刺激、同様に 30IRE 赤色の点滅、100IRE 白色の点滅の 3 種類で、倫理的ならびに同意取得の制約から、1, 2, 3, 4, 5, 6, 6.6, 7.5, 8.5 Hz とし、とくにⅠ群では 6 Hz までに留めた。また、併せて行ったストロボ閃光刺激(閃光刺激)は、丸型の日本光電製 LS-706A 型を用い、1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 18, 21 Hz について行った。

〔結果〕：Ⅰ群では、10 歳の女児 1 名で閃光刺激中に突発性発射(異常波)が誘発されたが、映像刺激で異常波が誘発された症例はなかった。Ⅱ群のうち 5 例では映像刺激で異常波が誘発され、1 例を除き刺激頻度が 5 Hz 以下でも異常波の出現をみた。この 5 例は全例閃光刺激によっても異常波が誘発された。また、他の 3 例は閃光刺激時のみ異常波を認めた。Ⅲ群では異常波は誘発されなかった。

〔結論〕：灰、赤、白色の 3 種の映像刺激(1～8.5 Hz)で異常波が誘発された症例は未治療のてんかん症例に限られ、対照群、「ポケモン」群では異常波誘発例はなかった。